

HOSEI UNIVERSITY

2-17-1 FUJIMI, CHIYODA-KU
TOKYO, JAPAN

TELEPHONE:
TOKYO (262) 2351

Tokyo, den 23. I. 1969
353-76 Kamiichibukata-machi,
Hachioji-shi, Tokyo

Sehr verehrter Herr Professor!

Ob Sie sich noch an mich erinnern, weiss ich nicht. Im April 1963 besuchte ich Sie in Budapest mit Frl. Hani (der japanischen Stipendiatin) und dem Sinologe Herrn Tökei, dessen Buchstabierung ich vergessen habe, und hatte die Gelegenheit, Ihre werte Meinung zuzuhören. Zuerst muss ich Ihnen vielmals um Entschuldigung bitten, dass ich so lange geschwiegen habe. Es ist mir natürlich stets am Herzen gelegen, Ihnen für die Gastfreundschaft noch einmal meinen tiefgefühlten Dank auszudrücken. Von Wien, wo ich damals gewesen war, war ich gleich nach der DDR hingefahren und meinen zweijährigen Aufenthalt dort genommen. Erst Ende 1965 bin ich nach Japan zurückgekehrt. Jetzt bin ich als Professor für die Geschichte der Sozialphilosophie an der Hosei-Universität in Tokyo tätig.

Hierdurch erlaube ich mir, heute zu Ihnen auch mit einem Anliegen zu kommen. Nämlich habe ich Ihr wertiges Buch "Über die Besonderheit als Kategorie der Ästhetik, Luchterhand, 1967" ins Japanische übersetzt und, wenn es uns vergönnt wäre, das Verlagsrecht zu erwerben, möchte ich sie in der "Hosei-University-Press" erscheinen lassen. Wie Sie wissen, haben Ihre Bücher einen weiten Leserkreis auch unter uns, besonders unter den Gebildeten. Ich, als einer der japanischen Marxisten, bin auch davon überzeugt, dass Ihre Auseinandersetzung mit der Dialektik viel zum Fortschritte des japanischen Marxismus beitragen kann. Es wäre Ihnen sehr dankbar, wenn Sie freundlich uns die Bitte der Veröffentlichung der japanischen Ausgabe genehmigen würden. Das Manuskript ist schon fertig und jederzeit zum Druck bereit. Wir möchten also möglichst bald Ihre Vorwort zur japanischen Ausgabe haben. Darf ich um gefällige Zusendung bitten? In der Anlage sende ich Ihnen meine Besprechung Ihrer "Gespräche, Rowohlt, 1967", die ich an der "Toshoshinbun" (Literaturzeitung), 16. III. 1968 mitgearbeitet habe. Ihrer zusagenden Antwort gern entgegensehend, bin ich

Ihr sehr ergebener

MTA FIL. INT.
Lukács Arch.

Chikara Rachi

Chikara Rachi

1969 1.23.



ルカーチ

池田浩士訳

ルカーチとの対話

ルカーチ×ホルツ、コフラー、アーベントロート

MTA FIL. INT.
Lukács Arch.

私の記憶にまちがいはなければ、**「哲」**が追加されたのだ。
ルカーチはエルンスト・フロツホ
と同年だから、いま八十歳のは
ずである。彼がマジナル語を文
芸批評を精力的に著しはじめた
のは一九〇二年、十七歳のときだ
から、彼は二つの世界大戦をば
んで六十六年も書きつづけてきた
ことになる。いままでそれに「対
ながら」、はっきりしたドイツ語
六年以来文字どおり禁断の

で語りつづけた老人の顔が意外に
温存だったこと、この対話を読み
ながら、そんなことを私は思い出
した。
最近の彼の著作活動がほとんど
そのなかで、この対話も二人の
西ドイツ文筆家を相手としてい
る。東ドイツでは彼の書はおよそ
六年以来文字どおり禁断の
である。対話(二つの部分からなる
集第十一および十二巻)から存在
り、美学の概念、リアリズム概
論(全集第十三および十四巻)へ
念、反映理論、イデオロギー批
判、非合理主義批判、新実証主義
判、スターリン主義批判、階級
では、彼のいう存在論とはなに
か。それはほゞよ
りも社会、人間、自
然をトータルにつ
かむための方法で
ある。社会は、そ
れ自体複合体であ
る人間からなる複
合体である。その
ような複合体の交
互作用を、そして
またそれと自然と
の交互作用を全体
的にとらえるこ
と、しかも本質と
現象形態との交互
作用として、さら
にまた一つの大き
な歴史的過程とし
てとらえること
が第一の眼目
である。
ところでそのた
りななかで、しかもその同一性に対
立した非同一性として、「目的論
的に」自己の労働を表現しようと
し、新たな合成を生みだそうとす
る。だが、この目的論は因果関係
と一致しないものではなく、むしろ
因果関係を基礎として生みださ
れる。だから、こうした同一性と
非同一性と同一性がたえず再生
産されて、歴史を生みだす。
次の論議は、この生産過程のな
かでは偶然のモメントが重要な
のだということである。人間は因
果的必然のなかで彼の目的論をつ
らぬこととするは、あり、つねに
「選択」しなければならぬ。
要約をやめて、ルカーチのことは
を直接引用しよう。「ここでもま
た重要なことは、ロシアが一九一
四年の社会的生産力をこえて発
展していくことがどうしても必要
だった、ということだ。これは
経済的事実です。しかし、この
事実が社会主義的形態をとった
といふことは、人間たちによる二
者択一の結果なのです。」「人間
とは答える存在である。答える存
在、というのは、彼が客観的現実
力に敬意をよこさなければならぬ
い。
(2・5刊、B6 一七四頁・六
八〇頁・合同出版(筆者)法
政大学助教授、思想史専攻)

「人間・答える存在」

多彩な論点を導きだす

良 知 力

介されたものとなるのか。それを
みきわめること、いわば現象を
「歴史的」に理解すること、それ
が第一の論点である。
だから、第一の論点からすれば、
彼の存在論は個別科学の基礎
あるいは媒介としてあらわれてく
る。さらに第二の論点からは、認
識論をおいて生活現実をそれ自
体として固定化してはならないと
いう結論がでてくる。いうまでも
なく、それは新実証主義批判であ
る。そして固定化が「操作」を感
味するといは、それはスターリ
ン主義批判にも通じる。
以上のことから、さらに二つの
論点がでてくる。一つは、むすか
しいこととはだが、「同一性と非同
一性」ということである。これは
現象形態との交互
作用として、さら
にまた一つの大き
な歴史的過程とし
てとらえること
が第一の眼目
である。
ところでそのた
りななかで、しかもその同一性に対
立した非同一性として、「目的論
的に」自己の労働を表現しようと
し、新たな合成を生みだそうとす
る。だが、この目的論は因果関係
と一致しないものではなく、むしろ
因果関係を基礎として生みださ
れる。だから、こうした同一性と
非同一性と同一性がたえず再生
産されて、歴史を生みだす。
次の論議は、この生産過程のな
かでは偶然のモメントが重要な
のだということである。人間は因
果的必然のなかで彼の目的論をつ
らぬこととするは、あり、つねに
「選択」しなければならぬ。
要約をやめて、ルカーチのことは
を直接引用しよう。「ここでもま
た重要なことは、ロシアが一九一
四年の社会的生産力をこえて発
展していくことがどうしても必要
だった、ということだ。これは
経済的事実です。しかし、この
事実が社会主義的形態をとった
といふことは、人間たちによる二
者択一の結果なのです。」「人間
とは答える存在である。答える存
在、というのは、彼が客観的現実
力に敬意をよこさなければならぬ
い。
(2・5刊、B6 一七四頁・六
八〇頁・合同出版(筆者)法
政大学助教授、思想史専攻)

である。対話(二つの部分からなる
集第十一および十二巻)から存在
り、美学の概念、リアリズム概
論(全集第十三および十四巻)へ
念、反映理論、イデオロギー批
判、非合理主義批判、新実証主義
判、スターリン主義批判、階級
では、彼のいう存在論とはなに
か。それはほゞよ
りも社会、人間、自
然をトータルにつ
かむための方法で
ある。社会は、そ
れ自体複合体であ
る人間からなる複
合体である。その
ような複合体の交
互作用を、そして
またそれと自然と
の交互作用を全体
的にとらえるこ
と、しかも本質と
現象形態との交互
作用として、さら
にまた一つの大き
な歴史的過程とし
てとらえること
が第一の眼目
である。
ところでそのた
りななかで、しかもその同一性に対
立した非同一性として、「目的論
的に」自己の労働を表現しようと
し、新たな合成を生みだそうとす
る。だが、この目的論は因果関係
と一致しないものではなく、むしろ
因果関係を基礎として生みださ
れる。だから、こうした同一性と
非同一性と同一性がたえず再生
産されて、歴史を生みだす。
次の論議は、この生産過程のな
かでは偶然のモメントが重要な
のだということである。人間は因
果的必然のなかで彼の目的論をつ
らぬこととするは、あり、つねに
「選択」しなければならぬ。
要約をやめて、ルカーチのことは
を直接引用しよう。「ここでもま
た重要なことは、ロシアが一九一
四年の社会的生産力をこえて発
展していくことがどうしても必要
だった、ということだ。これは
経済的事実です。しかし、この
事実が社会主義的形態をとった
といふことは、人間たちによる二
者択一の結果なのです。」「人間
とは答える存在である。答える存
在、というのは、彼が客観的現実
力に敬意をよこさなければならぬ
い。
(2・5刊、B6 一七四頁・六
八〇頁・合同出版(筆者)法
政大学助教授、思想史専攻)